

聖書箇所：ルカの福音書 11 章 45～54 節

説教題：預言者の血が流される

イエスは外側だけにこだわり、内側を見ようとしないパリサイ人に対し、「わざわざいだ。おまえたちは人目につかぬ墓のようで、その上を歩く人々も気がつかない。」と語ります。それを聞いていた律法の専門家は黙ってられません。「先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。」

今日の箇所では厳しいことばを語るイエスを見てとまどうかもしれません。でも確かにここにも大きな恵みが隠されています。そのことを見て参ります。

1 預言者の血の責任

(1) アベルの血 (創世記 4 章 1～12 節)

イエスは旧約聖書から、アベルとザカリヤのふたりのことを取り上げ、律法学者たちの誤りについて指摘していきます。その内容を見ていく前に、まずこのふたりの人物のことを簡単に説明しておきます。

まずアベルです。話は創世記までさかのぼります。アダムとエバがエデンの園から追放された後、エバはふたりの息子を産みます。兄はカイン、弟はアベルと呼ばれました。あるときふたりは神の前にささげ物を持っていきます。神はアベルのささげ物には目を留めるのですが、カインのささげ物には目を留めません。カインはこれを知り、弟をねたみます。神はそんなカインを知ってこう語ります。「あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべき

である。」カインは神の警告を無視し、弟を殺してしまいます。そのとき神はカインに語ります。

「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。」(創世記 4 章 10 節)

(2) ザカリヤの血 (第二歴代誌 24 章 20～22 節)

アベルのことは一旦ここで置いて、次にザカリヤについて見ます。イスラエルがダビデの手で一つの国家として統一されたのは、紀元前およそ千年頃と考えられます。その後まもなくイスラエルは北王国と南王国に分裂してしまいます。ザカリヤは、ダビデの時代からおよそ二百年ほど後に南王国の預言者として活躍した人でした。

当時の南王国の王様はヨアシュです。彼は若かったときは神に忠実に仕えていましたが、晩年になって神を捨ててしまいます。そのとき預言者ザカリヤは人々の前に立ち、こう叫びます。「あなたがたは、なぜ、主の命令を犯して、繁栄を取り逃がすのか。あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」これを聞いたヨアシュ王は怒り、ザカリヤを石で殺してしまいます。ザカリヤは死ぬときこう語りました。「主がご覧になり、言い開きを求められるように」(II 歴代誌 24 章 22 節)

カインは前もって神から警告を受けていたのにもかかわらず弟のアベルを殺しまし

た。ザカリヤは「悔い改めよ」警告したことにより、王であるヨアシュに殺されました。

2 この時代は責任を問われる

(1) 大昔のことなのに

日本語に「死人に口なし」ということわざがあります。しかし聖書の世界は違います。死んだ者であっても何百年にもわたって、彼らの叫び声が神の耳には聞こえています。そのことが50, 51節にあります。「それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。そうだ、わたしは言う。この時代はその責任を問われる。」

アベルが殺されたのは、創世記の初めの頃です。ザカリヤはイエスの時代から数えても八百年も前の人です。そんな大昔の殺人事件の責任をイエスは今の時代の人たちに問うと言うのです。みなさんはどう思うでしょうか。

一般に殺人を犯した者は刑事裁判にかけられ、その責任を問われます。事件に関わらなかった人は何も問われません。最近、パソコンを遠隔操作して脅迫メールを送ったという事件が起き、まったく関係ない人が逮捕されてしまい、大きな問題になったばかりです。ですから当然のようにこう言うでしょう。

「私はアベルもザカリヤも殺していない。私は何も責任はない。誤認逮捕だ。」しかし聖書を読むとき、私たちの常識は通用しません。何年経とうとも、そして実際にはその場になかったとしても、神はその責任を問いつけるというのです。

(2) さばき：殺された側から見る

いつけん理屈に合わないことを神は求めているように見えますが、違います。このことを殺された側からと殺した側、二つ面から見ておきたいと思います。

まず殺された側から見ます。アベルは最も良いささげ物を神にささげたがゆえに殺されました。ザカリヤは真理を語ったために殺されました。理不尽な話です。これと似たようなことが私たちの周りにたくさんあります。子どもが親から虐待され殺されています。学校では、いじめを受けて死んでいく子どもたちがいます。シリアでは内戦が続き、一般の人たちが爆弾や銃弾の犠牲になっています。テレビに、黒こげになったぬいぐるみが映し出されていました。神がいるならどうしてこんなことを許しておられるのかと叫びたくなります。

神は見て見ぬ振りをしているのでしょうか。神はこの現実をご覧になって何も思われないのでしょうか。そうではありません。今の時代であろうが、どんなに大昔のことであろうが、理不尽な理由で殺され死んでいった者たちの叫びを神は絶対に忘れることはありません。神は公正な方です。正しい者が理不尽に殺されることなど神の前であってはなりません。間違ったことはただされなければなりません。そのことを聖書では「さばき」と言います。

さばきと聞くと、すぐに「恐い」とか「恐ろしい」と否定的なイメージを想像します。でももし「さばき」がなかったならどうなるかよく考えていただきたい。「さばき」がないというのなら、戦争に巻き込まれ、殺された者は、運が悪かった。あれは犬死にだったということになります。もしそうだというのなら、結局、先に相手を打ち負かした者が常

に正しく、負けた者はどうなってもかまわない。神のさばきがないというのなら、こんな価値観がまかり通ることになります。そんな世界のどこに希望があるのでしょうか。どこにもありません。

だからこそ神は約束されるのです。神は必ずこの世界をさばかれます。アベルもザカリヤも無駄死にしたのではない。さばきは必ずなされる。神のさばきは私たちの希望のことばであることを覚えていただきたいと思えます。

(3) 罪：殺した側から見る

大昔に起きた殺人事件の責任をなぜ後の時代の人々に問うのか。二つ目は、殺した側から見ることにします。アベルを殺したのは兄のカインでした。ザカリヤを殺すように命じたのは、王であったヨアシュでした。殺人犯は明らかです。

だから、私たちには無関係なのでしょうか。カインが弟を殺した動機を突き詰めていけば、ねたみです。同じ兄弟なのに、どうしてあいつだけがほめられるのか。どうしてあいつだけが良い待遇を受けるのか。それが弟殺しの動機でした。どうです。皆さんの中にはそういう思いはありませんか。もしあると感じているなら、あなたもカインなのです。

ヨアシュ王は、「あなたがたは主を捨てたのだ」と語ったザカリヤに腹を立てました。なぜ腹を立てるのでしょうか。あなたは間違ったことをしていると真正面から言われ、王のプライドがひどく傷つけられたからでしょう。それでザカリヤを殺します。皆さんの中にはそういう思いはありませんか。もしあると感じているなら、あなたもヨアシュということになります。つまり私たちは正しい人を

殺してしまった罪人だったのです。

3 救い

(1) 荷物と知識

神から責任を問われています。しかし私たちは何も弁明ができません。どうしたらよいのでしょうか。神は私たちをさばき、滅ぼそうとお考えなのでしょうか。いいえ。ひどい罪を犯した者でありながら、なお神は私たちを愛し続けます。さばきから私たちを救わなければならないとお考えになります。その思いはどれほど強いと思いますか。どれほど激しいと思いますか。

46節を読みます。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本さわろうとはしない。」52節。「わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです。」

「荷物」あるいは「知識の鍵」。言い換えれば、罪から救われるための方法と言ってよいでしょう。律法の専門家たちは、罪から救われるためには外側をきよめなければならないと考え、行いによる救いを強調しました。そのようにして、人々に背負いきれない荷物を背負わせてしまい、神のみこころから遠く離れてしまいました。神は人々を救おうとして語ってくださった聖書のみことばなのに、自分たちの都合の良いように解釈した結果です。

(2) 預言者の血が求められる

その事をイエスは相手が怒り出すほどの厳しいことばで指摘します。そんなイエスのお姿にとまどうのでしょうか。でもよく見てい

ただきたい。

主は安全なところに逃げ込んで、自分は傷つかないようにしながら一方的に相手を責めているのでしょうか。もしそうであるなら、独りよがりと言われても反論はできないでしょう。事実はそうではありません。

46 節で「自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない」と言われます。つまりこう言おうとしているのではないですか。「わたしは人々に救いの荷を負わせるようなことはしない。救いの荷物は私自身が十字架で背負います。」

52 節もこう言いたいのです。「わたしは救いの知識を持ち去るようなことはしない。わたしはまっさきに十字架につき、そこから天の御国に人々を招く。救いの知識がだれにも邪魔されず、だれからも見えるように、私の十字架はゴルゴダの丘に立てられます。」

50, 51 節の別訳が欄外に記されています。「預言者の血がこの時代に求められるためである。」不思議なみことばです。預言者でもあられるイエス・キリストが十字架で血を流されたことを考えます。

主の口から語られる厳しいことば。それだけ主は私たちが救いたい思いで一杯なのです。こんなことを言えばますます不利なことは重々承知です。でも止めることができません。いのちを捨てることを覚悟して語っています。

この方が私たちに代わって責任をとってくださったことを、今朝もう一度思い起こします。